
魔の姫と冷血王です？

ふゆふゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔の姫と冷血王です？

【Nコード】

N6991Z

【作者名】

ふゆふゆり

【あらすじ】

魔術界と科学界が長きにわたり争ってきた世界
そんななか協和という名目で魔術界への興入れが決まった魔の姫
王は冷血非道と呼ばれてる。そんななか、姫は今の生活よりましな
日々がおくれればましと思い、少々の期待を抱いていざ戦地こと魔
術界へ！
しかし、姫の期待は裏切られた。いえいえ、悪いほうではなくいい
ほうにです！

序章てきな世界観（前書き）

はじめた書いたのですが、アイデアはわくけど文章構成がなスタンスで書いたので読みづらさあります

姫と王の戦いwを楽しんでいただけたらなと思います

序章 できない世界観

とある昔、この世界は魔術が使える人々、魔術をつかえない人々、ふたつの人種に分かれてた

最初のころは二つの人種はうまく共存しあっていた

しかし、時がたるにつれ魔術がつかえない人々は疑問に思った

我々が、魔術を使えないばかりに見下されてるのではないだろうか？

魔術が使えないから王になれないのだろうか？

魔術が使えないので、金持ちになれないのではないだろうか？

人々に渦巻いたその疑問は日々大きくなり、そして結論に達した

我々は、魔術まじゅつのせいで、幸せになれないのだと

そして、魔術がつかえない人々は魔術がつかえし人々を科学の力で抑圧し地の世界に追いやった

つかえなき人々はそのごも魔術がつかえし人々を虐げ平和と恵まれた日々をすごしていた

そんな世界で何百年後、魔術がつかえし人々の住む世界、魔術界の王族から一人の王が立ち上がった

その王は魔術がつかえなき人々、今は、科学を駆使する人々とよばれてる彼らの力を取り込み科学界と同様の力を手に入れ、平和ボケした科学界を制圧していった

そして、科学界の王は表向きは世界の平和本当は自身の保身のため姫を差し出し協和をはかった

民はそんな王を馬鹿だとあざ笑った

魔術界の王は冷血非道といわれ、恐れられてるのだ。

姫ひとつで協和などありえない

しかし、そんな民の予想は大きく外れた

しかも、その人との婚約まで発表され世界を揺るがした

世界が変わった瞬間だった

序章てきな世界観（後書き）

序章めんどくせえええ

暇人なのでたくさん更新できそうです

よんでくれたりしちやったりしてもらつとつれしいです

上機嫌なお姫様とメイド

ここは科学界

何百年も平和と恵まれた日々を謳歌してた世界は魔術界によってかえられていった

魔術界との協和のため送られる姫アルシアは、普通ならば悲観するところだが、逆にうれしがっていた

「ねえ、カテリア。魔術界での暮らしはどうなるのかしら？ここよりもっとひどくはならないと願うけど王様が私をどっかの離宮に追いやってくれたりする？」

アルシアは、せっせと旅仕度にいそしんでるメイドカテリアに声をかけた

「アルシア様、普通ならば王様は私を愛してくれるかしら？というべきだと思いますよ。」

カテリアは、動かしてる手を止めずに答えた

「だって、私に愛するところなんてないもの。根拠のない願望を願うより可能性のある願望を願ったほうがましよ。」

アルシアは、なんてことのないようにそんな言葉を吐いた

「アルシア様！自信を持ってください！あなたは王族のなかでも一番美しいです。」

カテリアのいった言葉は本当だった

長い銀髪に快晴の空のごとき色の瞳を長いまつげが覆ってる

白い肌に細い体軀がはかなさを増している

黒髪茶髪が多い王族の中でもその姿は妖精のようだった

しかし、アルシアは表に出ることはできなかった

それは、アルシアが魔術^{まじゅつ}をつかえし人々との間にできた子だったからである

王は、そんな娘を外に出させず王宮の敷地内のすみっこの離宮に罪人のメイドとその娘を一人だけつけ追いやった

衣食住は保障されるものも外に出ることはならず、いつも見張りがついていた

「美しいってなんなのかわからないから自分が美しいのかわからないわ。ほんのなかでの美しいと私の容姿は条件があってるけど本当に美しい人ってあったことないもの。あなたは美しくないんでしょ？」

「アルシア様は美しいですよ。さあ、最後の準備が整いました。向かいましょう魔術界へ。」

上機嫌なお姫様とメイド（後書き）

姫はアルシア

メイドはカテリアです

興奮姫と外の世界

どのくらい時間がたったのだろうか

アルシアたちは機械馬車（馬が機械なのだ。派手好きだとペガサスになったりしてしまう）にのって王宮への道のりをたどっていた

王族の輿入れは普通は大人数の護衛と召使をつれ、豪華な馬車で行進していくものだが彼女たちは少数の護衛と地味な馬車で道を進んでいた

理由は魔術界の王が嫁入り道具など持たず身一つでめだたないように来いという命令からだ

もともとアルシアのような魔の姫などをやっかいばらいしたかった王宮の者たちは嬉々としてその言葉を受け取ったが

そんな重いとは裏腹にアルシアは道のりを楽しんでいた

「ねえ、あの建物は何かしら！？カタリアの話を聞いたやつでは花屋というものかしら！？」

興奮した声でたずねるアルシアがいた

「そうですよ。あれが花屋です！」

なぜか、自信満々でこたえるカタリア

アルシアにとってはこんなちっぽけなことでも大きなことだった

なんせ一回も生まれてから外にでたことがないのだ

外の世界のことはカタリアから聞いたり本で読んだりしたが実際に体験したり見たことないのでわからなかった

「すごいわね！外の世界って。はじめてきれいや可愛いがわかったような気がするわ。」

「それはよかったですアルシア様。こうやって外に出れる日をどのくらい待ったものか・・・」

年はそう変わらないのに年寄りくさいことを言うカタリアにアルシアは笑ってしまう

「王様は、私を自由にしてくれるような気がするの。直感だけど。そんなような気がするの。だからこんなことだけで驚いてたらダメね。」

そんなことをいうアルシアに答えようとしたがついさっきみたアルシアの微笑が快晴の日の美しさのごとくきれいだったためすこし遅

れを取ってしまう

「・・・そ、そうですね。きっと大丈夫です!」

そんな話をしてる間に機械馬車は王宮へとついたのであった

興奮姫と外の世界（後書き）

アルシアの性格がおかしくなってきたる・・・

王と姫は忘れがちな間柄

「カテリア！　みて、すごく素敵なものばかり！」

カテリアは部屋中のものをみて仮にも一世の姫なのに走り回り大声を上げるアルシアをほほえましいような悲しいようなキモチで見てた

アルシア達は、王宮に着いたとたん護衛たちとさっさと引き離されて客室に入れられた

王宮のメイドたちが、ドレスをぬがせて無理やり入浴させようとしたが抵抗したらあっさりとさがっていった

そこらへんはなにか王から言われてるのだろうか

そんな思案をしながらカテリアはアルシアの様子を見た

この部屋には紙から宝石まで、たくさんのもので埋まってる

生きてる中でこんなにもたくさんのもはや上等なものを見たことのないアルシアにははちきれんばかりにうれしくて興奮するはずだ

派手なわけではないがあきらかに上等なものだと思えるクローゼットやイス、クッションなどが置いてあった

部屋は寒色をベースにして、いろんなところにはいつてる金色の刺繍が上品さをもたせていてアルシアにあってる

それにしても、部屋につれてこられてから一時間以上たってるのに誰も来ないのはおかしい

そのとき、ドアをたたく音が聞こえた

「アルシア姫、失礼いたします。陛下からのご伝言です。」

その言葉にカテリアとアルシアが固まった

とりあえず、扉をたたいた主を部屋へ入れた

「陛下はなんと？」

「いまから、お会いになられるそうです。私が案内いたします。私の名は、ジェナと申します。お見知りを。」

案内役のジェナというメイドのあとにつづいてアルシア達は外に出

29.

王と姫は忘れがちな間柄（後書き）

アルシアの性格は陽気とかじゃない感じにしたいんですよ

変な明るさのなかに、育った環境のなかで培われた歪みと狂ったところを入れていきたいんです

実はさびしがりやで夢見がち。すこし、ゆがんでるっていうキャラを書きたいんです

一番書くのを得意としてる性格のキャラですが、狂いすぎちゃいけないのでそこらへんの手加減が難しいです

頭がいい秘書タイプの人には苦手にされるような人柄にしていきたいです

とりあえず、アルシアの性格を固めたい

王と姫の最初の出会い（前書き）

露骨にクリスマス更新をさけるよ

王と姫の最初の出会い

「陛下、落ち着いてください。」

「落ち着いている。へんなことを言うな。」

陛下言こと魔術界の王カルヴィンは、いつになく落ち着きなく動き回ってた

幼馴染で側近のコンラッドはそんな王をあきれた眼で見る

彼は、いつもは落ち着きなく動き回るなんてことは絶対にしないし
そこまで彼の心を動かすことなんてなかった

いつも、誰の前でも無表情冷たい目で王にふさわしく動いてた

このように落ち着きがなくなるなどということはけしてないのだ

しかし、今日は別だった

彼女が来るのだ

何年も恋焦がれていた彼女、科学界の魔の姫アルシアが。

始まりは、9歳の冬だった

その日、王城には科学界からの渡り物がきていた

それがアルシアだ。

彼女は、魔力をもって生まれてきたがために幽閉されてきたが年は8歳ちかく、このままでは魔力の抑え方をしらず暴走してしまうかもしれないという科学界の重臣たちの考えで魔術界へ、修行という名の追放にあつたのだ。

それも、科学界の王妃に王子と姫の双子が生まれたからであつた

もしかして、跡継ぎは生まれなくなれば王直系の跡継ぎはアルシアしかないくなる。

そのため、生かされていたが子供が生まれたしかも、王妃からとなればアルシアはいらなくなる

なのでいつそ魔術界に押し付けてしまうという考えで送られてきた公式な場で顔を見たのは一度だがその妖精のごとき美貌にカルヴィンは釘付けになった

そして、顔に似合わずうつろな目も

退屈な日々にあきあきしてたカルヴィンはアルシアに興味を持ちあいにいこうとするが敵国の姫に正統な王子で一人息子を合わせに行かずがない

こうしてふたりの出会いは終わったのだ

しかし、カルヴィンはあきらめてなかった

わざわざ不利と思われる戦争まで科学界に吹っかけて勝利し、念願の姫を手に入れたのだ

その姫と今日会ったから落ち着いてるというほうが無理な話だ

彼女は12年たったらどんな姿に成長してるだろうか？

そんな思想をいだいてたところでドアがノックされた

「陛下、アルシア姫をお連れしました。」

カルヴィンは胸が高鳴るのを感じた

「・・・入れ。」

開いた扉の先にいたのはあの日の面影が残る絶世の美少女だった

王と姫の最初のおい（後書き）

こつこつ系の小説は、絶対ヒロインは美少女です
絶世つてつけたよ……

カルヴィンは、けつこつ乙女な感じですね。経験豊富な乙女w

うそだけど

透明な忘却（前書き）

年末は忙しい・・・

タイトルがすこしアレですね・・・

アルシアチーム視点です。

チーム（笑）

透明な忘却

「お初にお目にかかります、陛下。科学界の姫アルシアと申します。」

（え？）

挨拶をしたとたん王は顔をしかめた

失礼なことをしたのではないかと思っただが、今の挨拶は完璧なはずだ

「……本当に初めてか？」

「そうですか？」

意図のわからない質問をしてくる王に疑問がわく

カテリアも無表情で前を向いてるが疑問に思っていた

王は、金髪が混じる赤髪に金色の目をしていた。きれいな顔立ちだったので（あくまでよそうだが）これがもてるというやつなのだろうとアルシアは思った

部屋に嫌な沈黙が流れたところでさつきから黙りこくっていた茶髪のいかにも優男という風な美形の人物が話を切り出した

「アルシア姫、はるばる遠いところからお疲れ様でございます。私は陛下の側近のコンラッド・オールウィンと申します。残念ながら、陛下は激務のためお疲れようでもうしわけありません。」

つまりこの側近は暗に帰れといってるのだとすぐカテリアは理解したしかし、箱入り育ち（本当に悪い意味で）のアルシア様には、つたわるかしら？と心配になったカテリアだった。

「疲れてるなら、仕事しなければいいんじゃないんですの？」

カテリアの予想は悪いことに本当に悪いことにあつたってしまった

（普通そこは、部屋を出て行くところです！アルシア様！）

しかし、そんなカテリアの心の声が聞こえるはずもなくアルシアは、純粋な言葉（もとい悪意ににたもの）をかけた。

そんなアルシアにコンラッドは、困った。

本人が純粋にかけてる言葉なのだ。いやみでもないので反撃の仕様がなない。

そこで、さつきから不機嫌な顔で黙って王が口を開いた。

「コンラッド、アルシア姫と二人にさせろ。」

カテリアは、意味のわからない命令に困惑してるようだった
しかし、コンラッドにせかされ部屋を出て行ってしまった

「アルシア、本当に俺のことを少しでも覚えてないのか？」

また意図のわからない質問にアルシアは困惑する

「はあ・・・覚えてないと思いますけど・・・」

覚えてないと思うって何だとおもいながらアルシアは答えた

「12年前に一ヶ月だけ、魔術界にきただろう。そのとき一回だけ
あつたはずだ。」

12年前に確かに魔術界には来たがそのときは、自分でも何をし
てたかあまり思い出せない。

「いきましたが、昔のことなのであまり覚えていません。」

すこし苛立ちがこもった視線でみてきた王にイライラとする

「・・・もういい。部屋にもどれ」

その言葉にアルシアは歓喜した。

部屋に戻ればあの素敵な空間が広がってるのだ

この王と無駄な時間を過ごすよりは1000倍楽しい

「はいわかりました！ところで、外って自由に歩いていいですか！？」

いきなりテンションがあがるアルシアをみてさらにいらだった顔を
した王だった

「この王宮でお前につけるメイドにきけ。」

そつぷっきらぼつにいったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6991z/>

魔の姫と冷血王です？

2011年12月30日15時46分発行